

カテゴリーカルな意味 (下) —その性質と語彙指導・文法指導—

早津 恵美子

承前

4. 語彙指導・文法指導におけるカテゴリーカルな意味の役割

4.1. 語彙指導

4.1.1. 類義語

4.1.2. 多義語

4.2. 文法指導

4.2.1. 構文論的な性質

4.2.2. 形態論的な性質

おわりに

承前

この稿の前編にあたる「カテゴリーカルな意味 (上) —その性質と語彙指導・文法指導—」(『東京外国語大学論集 91 号』2015¹⁾) においては、「カテゴリーカルな意味」について、先行の捉え方を確認しつつ、奥田靖雄 (1974[1984]) などよりも広く捉える立場を提案した。すなわち、単語たとえば動詞の全体や名詞の全体をそれによって下位分類できるようなカテゴリーカルな意味 (動詞についての《意志》《無意志》、名詞についての《物》《人》《事》など) だけでなく、文法的な性質 (構文論的な性質と形態論的な性質) を同じくする小さな単語群のなかにもカテゴリーカルな意味をみいだすことの可能性を考えてみた。後編にあたるこの稿では、カテゴリーカルな意味をこのように捉えることが日本語教育における語彙指導・文法指導においてどのように応用できるかについて、具体的な事例を考えてみる。なお、この稿において上の早津恵美子 (2015) の中の節に言及する場合、単に、2 節、3.2 節のようにいう。また、カテゴリーカルな意味を《 》で表し、文法的な意味を [] で表すことも同じである。

4. 語彙指導・文法指導におけるカテゴリーカルな意味の役割

カテゴリーカルな意味は、語彙と文法をきりむすぶ・媒介するものであるから、語彙指導においても文法指導においても重要な役割をはたす。語彙指導においては、1.2 節でも少しふれたように、単語の語彙的な意味を教えるだけでなく、その単語の文法的な性質を教える必要があ

るが、²⁾ 単語の文法的な性質は、ひとつの単語に固有のものというよりは、ある類の単語群に共通の一般的なものであることがほとんどである。したがって、少なくとも指導する側はそれに気づいておく必要があり、その見極めにはカテゴリカルな意味を考えることが役に立つ。類義語の違いや多義語の個々の意味の違いを明らかにしたり、それぞれの使い方を指導したりするときにも同じである。文法指導においても、その文法事項をよりわかりやすくまた一般的な性質として（つまり応用や発展のきくかたちで）指導するためには、その文法を理解するのにより適切な単語を選んで説明する必要があり、単語の具体的な選択にあたって、カテゴリカルな意味を考慮することは大切である。

2節であげたカテゴリカルな意味についての説明も、語彙指導・文法指導につながるものであったが、この4節では指導という面により注目して、具体的な例をいくつか考えてみる。上述のように語彙指導と文法指導はからみあうが、以下ではいちおう別々に、それぞれの側から例をみることにする。

4. 1. 語彙指導

語彙指導においては、1.2節でみたような単語の語彙的な性質のさまざまを指導することになるが、カテゴリカルな意味に関わるのは単語の語彙的な意味であり、語構成（単純語・複合語・派生語）、語種（和語・漢語・外来語）、文体（日常語・文章語・俗語・雅語）、位相（幼児語、若者言葉、男性語／女性語、等）などは直接的にはカテゴリカルな意味と関わらない。³⁾ したがってここでは、語彙的な意味についてとくに類義語と多義語を例にして考える。

4. 1. 1. 類義語——類義語のあいだのカテゴリカルな意味の違い

3.2節でふれたように、類義語であっても文法的なふるまいが異なっていることがあり、そこにはカテゴリカルな意味が関わっていることがある。

(ア)「はたらく」と「つとめる」は労働という面において類義といえるが、⁴⁾「会社ではたらく」「会社につとめる」のように、それぞれデ格・ニ格の名詞（「N-デ」「N-ニ」）と組み合わせる。組み合わせる名詞の格（格助詞）にこのような違いがあることには、それぞれの動詞のカテゴリカルな意味の違いが関わっている。まず、「はたらく」と「つとめる」がどのような「N-デ」「N-ニ」と組み合わせるかを考えてみる。すると、次のa類の名詞は「N-デ はたらく」とも「N-ニ つとめる」ともいえるのに対して、b類の名詞は「N-デ はたらく」とはいえるが「N-ニ つとめる」とはいえないことがわかる（「屋上ではたらく」「*屋上につとめる」）：

a類：会社、銀行、大学、図書館、工場、病院、国連、裁判所

b 類：屋上、台所、庭、工事現場、駅前、山、外、故郷、海外、アフリカ

また、「はたらく」と「つとめる」は修飾する連用的な成分（副詞あるいはそれに準ずるもの）の内容も異なる。具体的な動作の様子を説明するもの（下の a 類）、動作をとりまく状況を表すもの（b 類）、比較的短い時間を特定するもの（c 類）は、「はたらく」を修飾することはできるが、「つとめる」にはふさわしくない（「てきばき {はたらく：*つとめる}」「悪天候のなかで {はたらく：*つとめる}」「30 分 {はたらく：?つとめる}」）：⁵⁾

a 類：てきばき、一生懸命、楽しそうに、おしゃべりしながら、汗水たらして、泣きながら、めがねをかけて、長靴をはいて、エプロン姿で

b 類：悪天候のなかで、雪に降られながら、照りつける太陽のもとで、厳戒態勢のなかで

c 類：30 分、朝から晩まで、徹夜で、夜遅く、早朝から

このような性質から考えると、「はたらく」は、「あそぶ、走る、運動する、運ぶ、見る、掃除する、話す」などと同じく、人の動作を表す動詞という性質が強く、「会社ではたらく」の「N-デ」は「動作の場所」という文法的な意味を表す。一方「つとめる」は「所属する、籍をおく、はいる（入社する、入学する、入所する）」などと同じく、人がある組織や団体の一員となることを表す動詞のグループであり、「会社につとめる」の「N-ニ」は「所属先」という文法的な意味を表すことがわかる。「国連につとめてアフリカではたらく」のような言い方にも両者の違いがうかがえる。それぞれの動詞と名詞との組み合わせは次のような性質だといえる：

「N-デ はたらく」：「N-ニ つとめる」

《空間》《動作》 《組織》《所属》

[動作の場所] [所属先]

(イ)「暮らす」と「住む」も、組み合わせる名詞の格が異なり、ふつう「N-デ 暮らす」「N-ニ 住む」である。⁶⁾「N」にはいずれも空間性的名詞がくるが、修飾する連用的な成分には違いあるいは偏りがある。次のような連用的な成分は、「暮らす」とは組み合わせるが、「住む」にはなじまない（「大阪で楽しく暮らす」「?大阪に楽しく住む」）：

楽しく、忙しく、生き生きと、にぎやかに、毎日山を眺めながら、庭で野菜をつくりながら、自給自足で、親切な隣人にかこまれて⁷⁾

「暮らす」には《動作》という側面があるのに対して、「住む」はむしろ《存在》的である。そして「N-デ」と「N-ニ」の文法的な意味が異なっている：

「N-デ 暮らす」	：	「N-ニ 住む」
《空間》《動作》		《空間》《存在》
[動作の場所]		[存在の場所]

(ウ) 形容詞の「楽しい」と「うれしい」も類義語であり、言語によってはこれをそのまま訳し分ける別々の形容詞をもたない言語もあるかもしれない。しかし、日本語の「楽しい」「うれしい」はどのような名詞を修飾するかという文法的な性質に違いがあり、それは両者の意味の違いの反映なのだと考えられる：

「楽しいN」といえる「N」：

気分、気持ち // おしゃべり、会話、散歩、旅行、ゲーム、パーティー、コンサート、
 授業、仕事、学生生活、音楽、映画 // 毎日、日々、夏休み、日曜日、時間、ひ
 ととき // 公園、テーマパーク、博物館、場所

「うれしいN」といえる「N」：

気分、気持ち // 知らせ、ニュース、手紙、メール、記事

「楽しい」「うれしい」はいずれも「気分、気持ち」を修飾することができるが、それ以外は、「楽しい」のほうは、行為やイベントや経験などを表す名詞（上の「おしゃべり、会話、……」）、それらが生じる時間（「毎日、日々、……」）や空間（「公園、テーマパーク、……」）などを表す種々の名詞を修飾できるのに対して、「うれしい」はそれらを修飾することはしにくい（「?うれしいおしゃべり」「?うれしい毎日」「?うれしい公園」）。それに対して「うれしい」は「知らせ、ニュース」など何らかの情報を含む言語作品を表す名詞を修飾することができるが、「楽しい」はこれらをやや修飾しにくい。⁸⁾ このように考えると、「楽しい」「うれしい」はいずれも人のある心理状態を表す形容詞であり、2.2節の(ウ)でみた《感情》の側面がともにあるのに加えて、「楽しい」には、人が行う行為や経験そのもの、あるいはそれを取りまく時間や場所に備わっている性質を述べるという《属性》の側面もあるのだと思われる。

(エ) そのほか、いくつかの例を簡単にあげる。「行く」と「おとずれる」はそれぞれ「N-ニ」

「N-ヲ」と組み合わせさつていづれも人がどこかに移動することを表すことができる（「京都に行く」「京都をおとずれる」）。しかし、「行く」が広く空間性的名詞の「N-ニ」と組み合わせるのに対して、「おとずれる」は「台所、屋上、教室、駅、郵便局」「黒板の前、友達のそば」などの「N-ヲ」とは組み合わせりにくい（「? 台所をおとずれる」）。もし「駅をおとずれる」「郵便局をおとずれる」と言うのであれば、それは単なる移動ではなく、「視察のために駅をおとずれた」「郵便局をおとずれて危機管理体制を調査した」といった状況のときであり、「? 友達をむかえに駅をおとずれた」「? 走って郵便局をおとずれた」のような移動そのものに重点のある場合に「おとずれる」を使うのはやはり不自然である。「行く」のカテゴリカルな意味は《移動》だといえるが、「おとずれる」は移動そのものというよりも、移動した先で、その場所やそこにいる人の雰囲気や様子を感じとったり、そこを積極的な関わりの対象としたりという《(移動先での) 働きかけ》という側面がある。「おとずれる」が「N-ヲ」と組み合わせることにはそれが反映しているのであり、同じく移動の面もありつつ「N-ヲ」と組み合わせる「たずねる、訪問する、みまう、とりかこむ、とりまく」などとグループをなす。

また、感情を表す「愛する」と「恋する」も類義語だが、「N-ヲ 愛する」「N-ニ 恋する」のように組み合わせる名詞の格が異なる。両者の意味の違いは、「N-ヲ」「N-ニ」と組み合わせる他の感情動詞群の中で考えると、「N-ヲ V」類には《感情の能動的な発動》という側面があり、「N-ニ V」類には《感情の受動的な生起》という側面があるといえそうである：⁹⁾

「N-ヲ V」という組み合わせをつくる感情動詞

喜ぶ、うらやむ、慕う、いとおしむ、疑う、うらむ、悲しむ、嫌う、悔いる、このむ、楽しむ、なげく、なつかしむ、にくむ、尊敬する

「N-ニ V」という組み合わせをつくる感情動詞

ほれる、おどろく、おびえる、あこがれる、いらつく、苦しむ、安心する、失望する、うっとりする、がっかりする、ぎよっとする、はっとする、びくびくする、ほっとする、かっとなる

人との関わりを表す動詞としての「ふるまう」と「もてなす」も類義語だといえるが、「客に酒をふるまう」と「客を酒でもてなす」のように、組み合わせる名詞の格が異なる。「N₁-ニ N₂-ヲ ふるまう」と「N₁-ヲ N₂-デ もてなす」の「N₁」「N₂」に入る名詞を考えると、「N₁」のほうはいずれも《人》だが、「N₂」のほうは、「ふるまう」と「もてなす」で異なっている。すなわち、「N₂-ヲ ふるまう」の「N₂」は「酒、料理、お菓子、ごちそう」のように相手にそれを与える物（とくに飲食物）であるのに対して、「N₂-デ もてなす」の「N₂」はそれらと組

み合わさるだけでなく、さらに「手づくりの器、落ち着いた家具」「クラシック音楽、土地に伝わる舞踊」などの名詞とも組み合わせる。「ふるまう」には、人に何かを与えるという《授与》の側面があって、その点で「あたえる、あげる、わたす、くばる、(料理を) だす」といった動詞とグループをなす。それに対して「もてなす」には、何らかの手段で人のある気持ちにさせる（とくに、喜ばせたりくつろがせたりする）という《態度》の側面があり、それを達成するために必要な手段として、料理なり調度なり雰囲気なりが用いられるのである。このような「もてなす」は「接待する、歓待する、(手厚く) 遇する、楽しませる」といった動詞とグループをなす。

「N ₁ -ニ	N ₂ -ヲ	ふるまう」	:	「N ₁ -ヲ	N ₂ -デ	もてなす」
《人》	《物》			《人》	《事物》	
[授与の相手]	[授与の対象]			[働きかけの対象]	[手段]	

すべての類義語がそうだというわけではないが、類義語のうちには上でみてきたように、他の単語との組み合わせという文法的な性質において異なっている類義語があり、それらにおいては、類義であるそれぞれの語彙的な意味のなかに他方とは異なるカテゴリカルな意味があるということである。

4. 1. 2. 多義語

次に多義語について考えてみる。ある単語にいくつかの語彙的な意味(意味 a、意味 b、意味 c、……) があるとき、たとえば a の意味と b の意味が異なる文法的なふるまいをすることがある。

(ア) 「ある」は様々な語彙的な意味をもつが、それらのうちに、物がある空間に存在するという意味と、ある空間でなにかが行われる・発生するという意味もある。それぞれ「a 教室に机がある」「b 公園でコンサートがある」のように、「N₁-ニ N₂-ガある_a」「N₁-デ N₂-ガある_b」という構文で使われる：

a 「N₁-ニ N₂-ガある_a」

「公園にベンチがある」「校庭にブランコがある」「駅前にポストがある」「教室に消火器がある」「待合室に売店がある」「劇場に休憩所がある」「フィンランドに幻想的な森がある」

b 「N₁-デ N₂-ガある_b」

「公園でコンサートがある」「校庭でサッカーの試合がある」「駅前で演説会がある」「教

室で入学試験がある」// 「待合室で爆発事故がある」「劇場で火事がある」「フィンランドでオーロラがある」

それぞれの「N₁」「N₂」をみると、「N₁」のほうは、いずれも空間性の名詞であるものの「N₁-ニ」と「N₁-デ」のように格が異なっている。一方「N₂」は、格はいずれも「N₂-ガ」であるが、「N」の種類が「ある_a」と「ある_b」で異なっている。aの「N₂」は、目で見たり触れたりすることのできる《具体物》(設備や場所を含む)であるのに対して、bの「N₂」は、人が行うイベント(「//」の前)や人の意志と関わらずに生じる事態(「//」の後)という、いわば《出来事》である。¹⁰つまり、「ある」の多義のそれぞれを反映するものとしてガ格の名詞(「N₂-ガ」)のカテゴリカルな意味がそれぞれに特有のものとなっている。「ある_a」は語彙的な意味においても文法的な性質においても「存在する」という動詞に近いのに対して、「ある_b」は「起こる、行われる、開催される」などとグループをなすといえる：

「N ₁ -ニ	N ₂ -ガ	ある _a 」
《空間》	《具体物》	
[存在の場所]	[存在の主体]	
「N ₁ -デ	N ₂ -ガ	ある _b 」
《空間》	《出来事》	
[実施-発生の場所]	[出来事の主体]	

(イ)「つとめる」は、前節で「はたらく」との類義性をみたが、多義語でもあり、そのひとつの“a(組織の一員として)仕事をする”という意味において「はたらく」と類義であった。「つとめる」には、ほかにも“b職務などをとりおこなう”(「会長をつとめる」)、“c精を出して物事にあたる”(「事件の解決につとめる」)がある。そしてそれぞれに、組み合わせる名詞のカテゴリカルな意味と格が特有のものとなる。「つとめる_a」と組み合わせるニ格の名詞には先に見たように《組織》というカテゴリカルな意味があり、「つとめる_b」と組み合わせるヲ格の名詞には《役割》というカテゴリカルな意味が、「つとめる_c」と組み合わせるニ格の名詞には《組織》というカテゴリカルな意味がそれぞれ見いだせる。aの場合も合わせて示すと次のように一般化できる：

a 「N 《組織》 - ニ つとめる_a」

(N : 会社、銀行、大学、工場、病院、国連、裁判所、など)

b 「N 《役割》 -ヲ つとめる_b」

(N：会長、議長、書記、司会、主役、ピッチャー、まとめ役、など)

c 「N 《(よい方向への) 変化》 -ニ つとめる_c」

(N：事件の解決、改良、改革、改善、刷新、など)

(ウ) 多義語のなかには、《物》性の名詞、《人》性の名詞、《事》性の名詞のいずれとも組み合わせあって「N-ヲ V」という組み合わせをつくる動詞がある。「起こす」(「a 倒れた木を起こす」「b 居眠りしている学生を起こす」「c 事故を起こす」)、「動かす」(「机を窓際に動かす」「多くの部下を動かす」「政治を動かす」)、「たてる」(「旗をたてる」「先輩をたてる」「計画をたてる」)や、「倒す、しばる、まわす、まるめる、おす、ゆるめる、いれる、しずめる」などである。「起こす」についていえば、《物》性の名詞と組み合わせる a では“横たわっている物をたたせる”、《人》性の名詞と組み合わせる b では“眠っている人をめざまさせる”、《事》性の名詞と組み合わせる c では“ある事態を生じさせる”という語彙的な意味をそれぞれ表している。つまり、組み合わせる名詞のカテゴリカルな意味の違い(《物》・《人》・《事》)は、「起こす」の多義のあり方とかかわっている。そして「起こす」のこの3つの語彙的な意味にはそれぞれ、《物の状態変化の引き起こし》というカテゴリカルな意味(「倒す、横たえる、切る、こわす、よごす、あたためる、等」と共通)、《人の生理変化の引き起こし》というカテゴリカルな意味(「寝かす、泣かす、酔わす、等」と共通)、《事態の発生》というカテゴリカルな意味(「きたす、もたらす、もよおす、誘発する、等」と共通)をみることができる：

「N 《物》 -ヲ 起こす_a」《物の状態変化の引き起こし》

「N 《人》 -ヲ 起こす_b」《人の生理変化の引き起こし》

「N 《事》 -ヲ 起こす_c」《事態の発生》

同じように、《物》《人》《事》性の名詞と組み合わせる上掲の「動かす、たてる、……」の場合も、「N-ヲ V」における名詞のカテゴリカルな意味の違いと多義のひとつの語彙の意味とは密接な関係があり、それぞれにおいて同類の他の動詞群と共通するカテゴリカルな意味をみることができる。

(エ) 他の例をいくつか簡単にあげる。「笑う」は「赤ん坊がニコニコ笑っている」のように、心理状態が反映された顔の動きを表すときには「N-ヲ」と組み合わせられないが、“ばかにする”といった意味のときには、「他人の失敗を笑う」「人のおろかさを笑う」のように「N-ヲ」

と組み合わせる。前者の「笑う」は「(ワーワー) 泣く、ほほえむ、ふきだす、ニコニコする」などと同じグループをなして《心理状態の反映としての生理変化の引き起こし》とでもいえるカテゴリカルな意味を共有し、後者の「笑う」は、「あざける、ばかにする、軽蔑する」などとグループをなして《人に対する感情的な態度》といったカテゴリカルな意味を共有する。

「さそう」は、「N₁《人》-ヲ N₂《イベント》-ニ さそう_a」(N₂:パーティー、旅行、コンサート、新年会、等)あるいは、「N₁《人》-ヲ N₂《空間》-ニ さそう_a」(N₂:山、海岸、公園、等)という構造で“人に対して積極的に働きかけて参加や移動やうながす”という積極的な意志動作を表すが、それに加えて、「(N₁《人》-ノ) N₂《心理状態》-ヲ さそう_b」(N₂:笑い、涙、眠気、興味、同情心)という構造でも使われ(「観客の涙をさそう」)、“人に対して積極的あるいは消極的に影響をあたえてその人のある気分をよびおこす”という引き起こしを表す。「さそう_a」には《よびかけ》という側面があって、それは「招待する、うながす、まねく、せきたてる」などと共通し、一方、「さそう_b」には《心理状態の引き起こし》という側面があって、「(興味を) そそる、(同情心を) ひく、(関心を) よびおこす、(反発を) まねく」などと共通する。

11)

また、「いらっしゃる」は移動動詞「いく、くる」と存在動詞「いる」に対する尊敬語であり、位相的な多義性がある。そして、いずれの意味であるかによって《移動》性の動詞、あるいは《存在》性の動詞としての文法的性質が発揮される(「部長は ご自宅から会社までタクシーでいらっしゃる」「部長は 朝から夕方までずっと会議室にいらっしゃる」)。

形容詞の多義語の場合にも、多義のひとつの意味と、組み合わせる名詞のカテゴリカルな意味とが関わることもある。「明るい」は、「部屋が明るい_a」「明るい_a色のセーター」のように光や色の状態についていうときや、「明るい_b性格」「人柄が明るい_b」のように人の性格についていうときは「N-ニ」との組み合わせは必須ではない。しかし、“ある事柄についてよく知っている”といった意味のときには「芸能界に明るい_c」「そのあたりの事情に明るい_c」のように《事柄》というカテゴリカルな意味をもつ名詞の二格と組み合わせることが必須である。そしてこの場合の「明るい_c」は、ある事柄に対する人の知識や能力について述べるという側面をもっている点で、「(外交問題に) 暗い、(コンピューターに) くわしい、(機械に) 強い、(計算に) 弱い」などとグループをなしている。「あまい、からい」も多義であり、《人》性の名詞の二格とくみあわせると、人に対する態度について述べるという側面が発揮される(「山田先生は生徒にあまい」と「彼は身内からい」)。

ある単語が多義であるとしてもその多義のすべてが常に明瞭に異なる文法的な性質をもつわけではない。しかし多義語の意味を指導するときに、その単語の文法的な性質も示すことが必

要かつ重要となることがあり、その際、組み合わさる単語および当該の単語のカテゴリカルな意味を考慮することが有効であることが多い。

4.2. 文法指導

4.2.1. 構文論的な性質

単語の構文論的な性質は、文法指導におけるいわゆる文型の指導（名詞のとり格も含む）と関わる。

（ア）同じ名詞と動詞が組み合わさるとき、名詞の格形式が異なっても文法的な意味があまり大きく異ならないということもあるが（「学校へ行く」と「学校に行く」の「N-ニ」「N-へ」の文法的な意味は[到着点]、「おばあちゃんからお年玉をもらった」と「おばあちゃんにお年玉をもらった」の「N-カラ」「N-ニ」は[授受の相手(出どころ)]など）、違いがうかがえることもあり、そこにはカテゴリカルな意味が関係していることが多い。

まず、「山にのぼる」と「山をのぼる」の違いについて考えてみる。ここでも手がかりとして、「N-ニ」「N-ヲ」にどのような名詞がはいるかを考えてみる。下にいくつかの名詞を3つに分けて示す：

- a類： 山、木、塔
- b類： 屋上、屋根、てっぺん、頂上、二階
- c類： 山道、坂道、階段

すぐわかるように、a類の名詞は「N-ニのぼる」「N-ヲのぼる」のいずれも使える。それに対して、b類の名詞は、「N-ニのぼる」は自然だが「N-ヲのぼる」はきわめて不自然、c類の名詞はその逆で、「N-ヲのぼる」は自然だが「N-ニのぼる」は不自然である。そこで、まずb類の名詞群、c類の名詞群の語彙的な意味を考えてみると、個々の名詞の語彙的な意味は名詞ごとにももちろん異なっている（c類の「山道」「坂道」「階段」の語彙の意味は、総体として相互に異なっており、類義語でもない）。しかし個々の意味の総体のなかには、その名詞群全体に共通する側面としてb類の名詞群には、建物や地形の最上部という特徴があり、c類の名詞群には、通過する場所として捉え得るという特徴がある。前者は点的な地点、後者は線的な空間といってもよい。そしてそのことが、b類の名詞が「N-ニのぼる」という組み合わせを、c類の名詞が「N-ヲのぼる」という組み合わせとなることを支えている。このようにして、b類、c類の名詞には、小さな範囲ではあるが、かりにそれぞれ《最上地点》、《通過する空間》とでもいうカテゴリカルな意味をみいだすことができる。そして、「N-ニのぼる」「N-ヲのぼる」という組み合わせ

において、「N-ニ」の文法的な意味は [到着点]、「N-ヲ」の文法的な意味は [通過点] である：

「N-ニ	のぼる」	：	「N-ヲ	のぼる」
《最上地点》			《通過する空間》	
[到着点]			[通過点]	

さらにそれぞれの「のぼる」の意味を考えると、「屋上にのぼってお弁当を食べた」は自然だが、「?坂道をのぼってお弁当を食べた」は少しおかしい。逆に、「坂道をのぼりながら歌を歌った」は自然だが、「?屋上にのぼりながら歌を歌った」は不自然だということが気づかれる。このようなことから、「屋上にのぼる」の「のぼる」には移動による《位置変化》という側面が強くあられ、「坂道をのぼる」の「のぼる」には、移動するのではあるがその途中に行く具体的な《動作》という側面が強くあられるのだと思われる。「のぼる」というのは、空間をどこかからどこかへ移動することであってそれは具体的な動作を伴うことがふつうなので、「のぼる」の語彙的な意味には、《位置変化》性も《動作》性もある、そして「N-ニ」「N-ヲ」と組み合わせるときにいずれかの側面が強く発揮されるということである。

では a 類の名詞「山、木、塔」はどのような名詞だったのだろうか。これらは上下の空間的な広がりをもつ物体であり、そこに《最上地点》の側面も《通過する空間》の側面もそなえた名詞だといえる。したがって、「のぼる」は「{山/木/塔}にのぼる」とも「{山/木/塔}をのぼる」ともいうことができ、それぞれにおいて、「N-ニ」は [到着点]、「N-ヲ」は [通過点] という文法的な意味を表すことになる。

以上のような分析をふまえて、「N-ニのぼる」と「N-ヲのぼる」の違いに戻って考えると、前者は《移動 (位置変化)》に注目する組み合わせ、後者は《移動 (動作)》に注目する組み合わせだといえる。「N-ニ」は「ヘリコプターで山にのぼった」という、歩行などによる具体的な動作をともなわない位置変化も表すことができるのに対して、「N-ヲ」はそれが不自然である（「?ヘリコプターで山をのぼった」）のはそのことの反映である。それぞれの「のぼる」は次のような動詞とグループをなす：

「N-ニ V 《移動 (位置変化)》」の「V」:	のぼる、つく、到着する、達する
「N-ヲ V 《移動 (動作)》」の「V」:	のぼる、歩く、走る、およぐ、はう

(イ) 名詞の格の違いと動詞との関係について次に、「N-デ」と「N-ニ」の例を考えてみる。「a 庭で N をつくる」「b 庭に N をつくる」はどちらも物を生産することを表すが、両者を比べる

と a は、「庭で {犬小屋/木の椅子/おもちゃ箱/陶器/俳句} をつくる」のように、広く種々の「N」について用いることができるのに対して、b は、「庭に {犬小屋/ベンチ/池/水飲み場/避難用の穴} をつくる」のように、動作の終了したあと庭に存在するようになるものについてしか使いにくい（「庭に {?おもちゃ箱/?陶器/?俳句} をつくる」）。「犬小屋」のようにどちらとも組み合わせる名詞もあるが、「庭で犬小屋をつくる」と「庭に犬小屋をつくる」とは、動作のあと「犬小屋」がどこに存在するかを表し分けることができる。このようにみてくると、「庭で N をつくる」は生産する動きのほうに注目する表現であるのに対して、「庭に N をつくる」は生産したあとそれがそこに存在するようになることに注目する表現であるといえる。「庭でつくる」の「つくる」には「庭で {あそぶ/喧嘩する/話しあう/歌を歌う/すもうをとる}」などにみられる《動作》という側面が発揮され、「庭につくる」の「つくる」には、「庭に何かを {設置する/そなえる/つくりつける/ (穴を) ほる}」などにみられる《設置・出現》という側面が発揮される：

「庭で 犬小屋を つくる」	:	「庭に 犬小屋を つくる」
《空間》		《空間》
	《生産 (動作)》	《生産 (設置・出現)》
[動作の場所]		[出現する場所]

「N-デ」と「N-ニ」の例として、「山の上 {で/に} 星をみる」を考える。「山の上で星をみる」は“山の上で見るといふ動作を行う”ことを、「山の上に星をみる」は“（山のふもとや別の場所から見て）山の上に星があることをみつめる（発見する）”ということを表している。それぞれの「山の上で」「山の上に」の文法的な意味は、前者では [動作の場所]、後者では [物の存在場所] である：

「山の上で 星を みる」	:	「山の上に 星を みる」
《空間》		《空間》
	《動作》	《発見》
[動作の場所]		[物の存在場所]

この後者のほうは「廊下に血痕を見つける」「ゴミ捨て場に金塊を発見する」「玄関に叫び声を聞きつける」などと同じく、ある場所に何かがあることを発見するということを表現する構造である。¹²⁾

もうひとつ、「銀行 {で/に} 金を預ける」を考えると、「銀行」という名詞は「学校、会社、工場」などと同じく《空間》性も《組織》性ももっている (2.6 節および 4.1.1 節参照)。したがっ

て「預ける」は、デ格の「銀行で」と組み合わせると、「銀行《空間》で金を預ける《動作》」という構造となり、ニ格の「銀行に」との組み合わせると、「銀行《組織》に金を預ける《授与》」という構造となる。「X 銀行で Y 銀行に金を預ける」といえるのはそのためである。

(ウ) 名詞のカテゴリカルな意味の違いによって動詞との組み合わせり方(文型)が異なることもある。「話す、しゃべる」はヲ格の名詞(「N-ヲ」)と組み合わせりうる動詞だが、ほとんどの名詞の「N-ヲ」とはそのままでは組み合わせらず(「{?友だち/?学校/?映画/?旅行/?将来/?机}を話す」)、「N-ノコト-ヲ」のように「コト」をつけるか(「友だちのことを話す」)、「N-ニツイテ」(「学校について話す」)などにしなければならない。「N-ヲ 話す」といえるのは、「{日本語/韓国語/母語/方言}を話す」のように言語そのものを指す名詞か、「{自分の気持ち/秘密/本のあらすじ/計画}を話す」のように言語で伝えられる内容がどのような質のものかを特徴づける抽象名詞である。それぞれのカテゴリカルな意味を短い単語で言い表すのは難しいが、たとえば、前者は《言語名》、後者は《質的に特徴づけて言語化される抽象的事柄》のように表すとすれば、「N-ヲ 話す」ということができるのは、「N」がこういったカテゴリカルな意味をもつ名詞のときのみだということになる、なお、「日本語を話す」と「日本語 {のこをを/について} 話す」とは異なっており、「日本語」という単語には上の2つの側面がともに備わっていることが気づかれる。「考える」も「テストを考える」と「テストのことを考える」は異なっている。

(エ) 名詞と移動動詞の組み合わせにも似たことがみられる。移動動詞が移動の出発点や到着点を表す名詞と組み合わせるとき、「{公園/山}に行く」「{京都/海}へ行く」「{外/北海道}から帰る」ということはできるが、「{*友だち/*親}に行く」「{*先生/*駅員}へ行く」とはいえず、¹³⁾「{?机/?冷蔵庫/?窓}から戻る」もあまり自然ではない。移動動詞と「N-ニ/へ/カラ」との組み合わせが許されるのは《空間》性をもつ名詞であり、そうでない名詞はいったん「N-ノ トコロ/ハウ/ソバ/近く」などの形にするという、いわば空間化の手続きをとることが必要である(「友だちの {ところ/そば/ほう}へ行く」「机の {そば/前}から戻る」)。このように、名詞が《空間》というカテゴリカルな意味をもつか否かが、移動動詞との組み合わせり方という文法的な性質と関わっている。

「仕事、買物、食事、出張、調査、練習、往診、見回り」などの名詞は、「N-ヲスル」ということができる(「仕事をする」「買物をする」)。そしてこれらの名詞は、「仕事に行く」「出張から帰る」のように「N-ニ/カラ」の形で移動動詞と組み合わせることができる。これらの名詞には《動作》というカテゴリカルな意味をみることができ、「N《動作》-ニ行く」「N《動

作》-カラ 帰る」において「N-ニ」は移動先で行う動作、「N-カラ」は移動の前に行った動作を表している。

(オ) 受身文において、動作主は「N-ニ」だけでなく「N-カラ」や「N-ニヨッテ」で示されることがよく知られており、それぞれの形式とその動詞類との関係もおおよそ明らかになっている。¹⁴⁾ 「N-カラ」になりうるのは「友達から {言われる/たずねられる/うちあけられる/質問される}」のような《発信》というカテゴリカルな意味をもつ動詞類、「先生から {譲られる/渡される/配られる/贈られる}」のような広い意味での《物の授与》という動詞類、「みんなから {好かれる/尊敬される/嫌われる/ほめられる/信頼される}」のような《感情や感情の現れとしての態度》という動詞類にほぼ限られている。「N-ニヨッテ」は文体も関わるが、「山田氏によって {つくられる/作曲される/発見される/みつけだされる}」のように《生産》や《発見》性の動詞の場合に多いとされる。受身文における動作主表示にも、このように動詞のカテゴリカルな意味が関わっている。¹⁵⁾

4.2.2. 形態論的な性質

単語の形態論的な性質に関わるカテゴリカルな意味に注目することが文法指導に役立つことがある。以下にいくつかをみていくがもちろん網羅的ではない。

(ア) 1.2 節で誤用例をみたとき、動詞の「V-ナガラ」の形について、「(11) 彼はすわりながら本を読んでいた」の「すわりながら」はおかしくて「すわって」が正しいとした。「V-ナガラ」は「歩きながら話しをする」「お菓子を食べながら勉強する」のような組み合わせで [動作の同時並行] という文法的な意味を表すが、「{?すわりながら/?めがねをかけながら/?パジャマを着ながら} 本を読む」という組み合わせはおかしい。「V₁-ナガラ V₂」によって [動作の同時並行] を表せるのは、「V₁」も「V₂」も、アスペクト的に《動作(継続)》というカテゴリカルな意味をもち (2.2 節の (イ))、かつ、人が意志的に行う具体的な動きや人の表情を表す動詞（「読む、書く、聞く、食べる、歩く、走る、歌う、見る、考える」「笑う、にこにこする」など）であるのが基本である。上の「すわる、(めがねを) かける、(パジャマを) 着る、……」は、アスペクト的に《変化》(そのうちの《姿勢や格好の変化》) を表す動詞であるため「V-ナガラ」が不自然になる。4.2.1 節の (ア) で、「坂道をのぼりながら歌を歌った」は自然だが「?屋上にのぼりながら歌を歌った」は不自然であるという違いをみたが、それも、「坂道をのぼる」が《動作》的で、「屋上にのぼる」が《位置変化》的であることによるものである。「V-ナガラ」はまた、「知っていながら教えてくれない」「悪いとわかっているながらやめられない」「近くに住んでいながら手伝いに来てくれない」など、[逆接] ([反戻]) とされることのある文法的な意味を表すことがある。¹⁶⁾ この用法で使われる動詞は、動詞ではあるが人の一時的・

恒常的な状態や性質を表すものであり、「幼いながら感心だ」「子供ながらしっかりした物言い」のような形容詞や名詞の「～ナガラ」に近い。

(イ) 動詞のカテゴリカルな意味のうち《意志》《無意志》に関わって、次のようなことがある。2.2 節の (イ) でみたように、命令形や勧誘・意向形などの形でそれぞれ [命令]、[勧誘・意向] という本来の文法的な意味を表すのは《意志》性の動詞である（「早く行け」「みんなで一緒に行こう」「こんどこそ煙草をやめよう」）。《無意志》性の動詞たとえば「(雨が) ふる」が「²雨、雨、ふれ、ふれ、かあさんが、蛇の目でお迎えうれしいな²……」（童謡『あめふり』）というように命令形をとることがあるが、これは「雨」に対して命令をしているわけではなく、「雨が降ってほしい」という話し手の願望を述べる表現である。「(屋根に積もった雪をみて) 早くとけてくれ」「(花に向かって) きれいに咲いてね」という表現を用いることもあるがこれも同様に願望を表しており、《無意志》性の動詞が形態的に命令形をとったとしても本来の [命令] を表すわけではない。なお、《意志》性の動詞（たとえば「打つ」）であっても「(テレビで野球放送を見ながら) 打て！」というような、命令することのできない状況で命令形を使つたとすると、これはやはり話し手の願望の表現である。

「V-ベキ」形の文法的な意味にも《意志》《無意志》が関わっており、「V-ベキ」が「しなければならない、するのがよい」に近い [当為] という文法的な意味を表すのは、「君も行くべきだ」「学生は勉強すべきだ」のように、《意志》性の動詞の場合に限られる（「*雨がふるべきだ」「*君も老けるべきだ」）。

(ウ) 動詞の「V-テ」形の文法的な意味は非常に多様であり、それについての研究は少ない。¹⁷⁾ 動詞のカテゴリカルな意味だけで簡単に説明できるという現象ではないが、次のような傾向はみいだせる。上の (ア) で、《姿勢や格好の変化》というカテゴリカルな意味をもつ動詞は「{? すわりながら / ? めがねをかけながら / ……} 本を読む」とはいえず、「V-テ」を使って「V₁-テ …… V₂」とするのがふさわしい（「すわって本を読む」）ことをみた。この場合の「V₁-テ」は、人が「V₂」という主たる動作を行うときの副次的な動作（いわゆる [付帯状況]）を表す。また、次の例では、《意志》《無意志》性に関わって、a のように《意志》性の動詞の「V₁-テ」の文法的な意味は [手段]、b のように《無意志》性の動詞の「V₁-テ」の文法的な意味は [原因] である：

- a 「窓をあけて新鮮な空気をいれる」「お金をかせいで両親に送る」 — [手段]
- b 「窓があいて風がふきこんできた」「お金をなくして困っている」 — [原因]

以上、この4節では、語彙指導・文法指導においてカテゴリカルな意味による説明が生きてくると思われる言語事実を、あまりまとまりのない述べ方ではあるが、例をあげて考えてきた。ここで述べたもののほかにも、種々の文法的な性質をうみだす広狭さまざまなカテゴリカルな意味がみいだせると思われる。

おわりに

本稿（早津恵美子 2015「カテゴリカルな意味（上）」とこの「カテゴリカルな意味（下）」をあわせて「本稿」とよぶ）では、「カテゴリカルな意味」について、その実体や範囲をさぐりつつ、日本語の具体的な分析や教育の実践においてどのようにこの概念を生かすのかを考えてきた。本稿においてカテゴリカルな意味としてとりあげたものの中には、名詞についての《人》《具体物》《空間》《時》、動詞についての《動作》《変化》《状態》《意志》《無意志》、《働きかけ（他動）》《非働きかけ（自動）》、形容詞の《感情》《属性》など、これまでの日本語研究のなかで、カテゴリカルな意味という言い方はされないにしても、広く認められて文法現象の説明に用いられているものも多い。教育の実践のなかでも、気づかれていて指導の際に用いられているものが少なくないと思われ、日本語教育の教科書や国語辞書の中には、動詞がどのような名詞と組み合わせるかについて、本稿のカテゴリカルな意味と似た観点から完結に特徴が示されているものもある。¹⁸⁾ 小泉保他（編）の『日本語基本動詞用法辞典』（1989）は、動詞について、形態論的な性質や構文論的な性質が個々に詳しく示されている早い時期のものであり、そこにも同様な観点がうかがえる。また、森田良行（1994）の「意味と文法は盾の両面—あとがきに代えて」（pp.417-420）のなかで、「a コピーを事務所に忘れた」「b コピーを事務所に頼んだ」について、「コピー」という名詞が a ではモノ名詞、b ではコト名詞であり、「事務所」という名詞が a ではトコロ名詞、b ではヒト名詞であること、また「c コピー係を事務所に設けた」における「コピー係」はコト名詞、「事務所」は“事務組織・事務機構”であることを指摘し、こういったことは a、b、c の動詞の意味の違いによるとされる（a、b、c の記号は早津）。そしてそのまとめとして、「このように言葉の結合、つまり表現構成は、それぞれの語の意味と密接に関連しており、それを無視しては考えられない。語彙と文法とは一体となって文作りに参画し、全体としての文の意味を構成しているのである」と述べられている。これも、本稿でいうカテゴリカルな意味の位置づけと同趣だといえよう。

本稿は先行の様々な研究の成果や指摘から多くを学びつつ、より意識的・積極的に、単語の語彙的な意味と文法的な性質をつなぐものとして、語彙的な意味のなかにカテゴリカルな意味をみいだそうとしたものである。ある類の単語群が同じ文法的な性質を示すとすれば、その類のそれぞれの単語の語彙的な意味のなかに、当該の文法的な性質をうみだす共通の一般的な側

面すなわちカテゴリーカルな意味があるからだと考える立場にたち、それをみいだそうと努めたことになる。ひとつの単語にみられる文法的な性質を分析するときにも、他の単語にも共通する一般的な性質のなかで捉えようとした。また、カテゴリーカルな意味を意識して捉えることが、語彙指導・文法指導の実際においてどのように生かされるのかも具体的に考えてみた。4 節(この稿) であげたカテゴリーカルな意味の中には、奥田靖雄 (1974[1984]) 他で構想されていたカテゴリーカルな意味の趣旨からはずれるものも含まれているかもしれないが、それにあまりとらわれず本稿なりに指導面との関係をみいだそうとしてみた。ただし、単語の語彙的な意味のなかにある、文法的な性質をうみだしている側面という原則からははなれないよう留意した。カテゴリーカルな意味としてみとめうるものにどのようなものがあるか、その範囲は、研究や教育のなかでさがしていくことでよいのではないか、その過程を通してカテゴリーカルな意味の本質も明らかになっていくのではないかと考える。

注

- 1) 早津恵美子 (2015) の構成は次のようになっている。
 - はじめに
 - 1. 単語と文
 - 2. 語彙的な意味・文法的な意味・カテゴリーカルな意味
 - 3. 「カテゴリーカルな意味」という術語
- 2) もちろん、必要に応じて単語の文体的な性質(日常語・文章語・俗語・雅語)や語用論的な性質を教えることも大切になる。
- 3) ただし、語構成において知られる複合動詞の次のような性質にはカテゴリーカルな意味が反映している。すなわち、石井正彦 (1984[2007:103]) の指摘するように、「 V_1+V_2 」の複合動詞の多くは「過程結果構造」という構造をつくっており、そのとき「 V_1 」は《主体の動作》性をもつ動詞、「 V_2 」は《主体あるいは客体の変化》性の動詞であることがほとんどである(「おしたおす、おしつぶす、たたきわる、たたきこわす、握りつぶす、ねじまげる、投げ入れる、投げ上げる、引き寄せる、引き出す、切り倒す」)。
- 4) たとえば『日本国語大辞典』(第一版第四刷 1982 小学館)では、それぞれの意味のひとつとして次のような語釈がされていて、かなり似た説明になっている。
 - 「はたらく」：努力して事をする、精出して仕事をする。
 - 「つとめる」：精を出して物事に当たる、努力して行う。
- 5) これらは副詞類のカテゴリーカルな意味の違いといえる(a類は動作の様子、b類は空間的時間的な状況、c類は時間、という側面があるといえそうである)。
- 6) 「彼は人生の晩年を遠く異郷に暮らした」のような使い方もあるが、日常語ではなく文体的にやや高く文学的な表現である。そして語彙的な意味も「住む」に近くなっている。
- 7) これらに共通する意味的な側面をさがすとすれば、《具体的な動作の様子あるいはそれにともなう心理状態》といえるだろう。
- 8) 「楽しい」もこれらと組み合わせられないわけではないが、「楽しいニュース」と「うれしいニュース」では、「ニュース」の内容がいくらか違っている。たとえば、テレビなどのニュースで、「ある街で新年に、幼稚園児たちが本物そっくりの衣裳を身につけて歌舞伎の演目を演じる催しがあった。途中で袴を踏んで転んでしまう子がいたり、セリフを忘れて泣きだしてしまう子がいたり」と様々なハプニングがあったが、ほほえましい場面が多く、大きな拍手で終わった。」ということが放送されたとき、このような

- ニュースは、「楽しいニュース」ではあるが「うれしいニュース」というのにはなじまない。
- 9) 寺村秀夫 (1982:139-154) は、両者について、「N-ヲ」類は「能動的な心の動き、積極的感情の発動」を表し「N-ヲ」が感情の向かう対象を表すのに対して、「N-ニ」類は「一時的な気の動き」を表し「N-ニ」が感情の誘因であるとしていて説得的であり、本稿の捉え方はこれに学ぶところが大きい。
 - 10) この《出来事》というカテゴリカルな意味は、次のこととも関わっている。すなわち、「N-ガ {始まる／続く／終わる}」や「N-ヲ {始める／続ける／終わる／きりあげる}」のように、出来事の開始・終了・経過などを表す動詞 (いわば《進行》というカテゴリカルな意味をもつ動詞) と組み合わせるのは《出来事》性をもつ名詞である (「コンサートが始まる、授業がおわる、パーティーが続く、会議を始める、仕事をおえる、祭りを続ける」)。
 - 11) ただ注意しなければならないのは、「反感をかう」「気をひく」のように組み合わせが完全に固定して慣用句になっているものについては、この「かう」「ひく」という動詞の語彙的な意味に「さそう」類と共通する側面をもとめることはできないことである。
 - 12) このような構造は、言語学研究会 (編) (1983) に再録されている奥田靖雄 (1968-72) において「発見の構造」とされているものである。
 - 13) 「医者に行く」とはいえるのだが、このときは「医療機関に行く」ということを表しており、《人》としての「医者」ではない。公園の出口に医者がいたとして、その人のいる場所へ移動することを「医者に行く」とはいえない。
 - 14) 寺村秀夫 (1982)、砂川有里子 (1984)、工藤真由美 (1990) などを参照。
 - 15) 動作主相当のものが「N-デ」で示される受身文もある (「木々が風でなぎたおされる」//「車が青いシートでおおわれている」「四方を海でかこまれている」//「この花は園児達の手で植えられた」)。この場合には動詞だけでなく「N-デ」の名詞のカテゴリカルな意味が関わっており、「N」は《人》ではなく (「*この花は園児達で植えられた」)、《現象》や《物》や《身体部位》などである。
 - 16) 金田一春彦 (1950)、三上章 (1953) などを参照。
 - 17) 言語学研究会・構文論グループ (1989)、仁田義雄 (1995) などを参照。
 - 18) 筑波ランゲージグループによる初級日本語教科書『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』(1996 凡人社) の「DRILLS」の巻には各課の新出単語を一覧する「New Words in Drills」があり、そこに、「〈person/thing〉が」と組み合わせる動詞として「みつかる、決まる」が、「〈person〉が〈thing〉を」と組み合わせる動詞として「始める、決める、こわす」が、「〈person〉が〈matter〉と」と組み合わせる動詞として「思う」があげられていて、組み合わせる名詞の意味的な種類と動詞との関係が考慮されている。また、『新明解国語辞典』(三省堂) は第五版 (1997) から重要動詞や形容詞について、〈なにヲ〉〈だれヲ/だれニ〉〈だれト〉といった型が記されている。

参考文献

- 言語学研究会 (編) 1983『日本語文法・連語論 (資料編)』、東京: むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ 1989「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」、『ことばの科学 2』、東京: むぎ書房
- 早津恵美子 2009「語彙と文法との関わり—カテゴリカルな意味—」、『政大日本研究』、6号、台北: 国立政治大学日本語文学系
- 早津恵美子 2010「連用修飾語の解体—再構築にむけて—」、『国文学 解釈と鑑賞』、74巻7号 (特集〈文の成分〉から文をとらえる一文の分析と理解のために)、東京: 至文堂
- 早津恵美子 2015「カテゴリカルな意味 (上) —その性質と語彙指導・文法指導—」、『東京外国語大学論集』、91号、東京: 東京外国語大学
- 早津恵美子・佐藤佑・茶谷恭代・中山健一・福原聡美 2012『大学生のための語彙論入門』(コーパスに基づく言語学教育研究資料 4、東京: 東京外国語大学大学院総合国際学研究院
- 石井正彦 1984「複合動詞の成立—V+V タイプの複合名詞との比較—」、『日本語学』、3巻11号、東京:

- 明治書院 (一部修正が加えられ、石井正彦 2007『現代日本語の複合語形成論』、東京：ひつじ書房に再録)
- 石綿敏雄・荻野孝野 1983「結合価から見た日本文法」、水谷静夫 (編)、『朝倉日本語新講座 3 文法と意味 I』、東京：朝倉書店
- 金田一春彦 1950「国語動詞の一分類」、『言語研究』、15 号、東京：日本言語学会 (金田一春彦 (編) 1976『日本語動詞のアスペクト』に再録)
- 小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹 (編) 1989『日本語基本動詞用法辞典』、東京：大修館書店
- 工藤真由美 1990「現代日本語の受動文」、『ことばの科学 4』、東京：むぎ書房
- 松本泰丈 (編) 1978『日本語研究の方法』、東京：むぎ書房
- まつもとひろたけ 1979「に格の名詞と形容詞とのくみあわせ—連語の記述とその周辺—」、言語学研究会 (編)、『言語の研究』、東京：むぎ書房
- 三上章 1953『現代語法序説—シンタクスの試み—』、東京：刀江書院
- 宮島達夫 (国立国語研究所) 1972『動詞の意味・用法の記述的研究』、東京：秀英出版
- 宮島達夫 1996「カテゴリー的多義性」、鈴木泰・角田太作 (編)、『日本語文法の諸問題』、東京：ひつじ書房
- 森田良行 1994『動詞の意味論的文法研究』、東京：明治書院
- 成田徹男 1983「格による動詞分類の試み—自然言語処理用レキシコンのために—」、『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究-5- 計算機用レキシコンのために』、東京：情報処理振興事業協会
- 仁田義雄 1986「格体制と動詞のタイプ」、『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究-7- 計算機用レキシコンのために (2)』、東京：情報処理振興事業協会
- 仁田義雄 1995「シテ形接続をめぐって」、『複文の研究 (上)』、東京：くろしお出版
- 奥田靖雄 1968-72「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」、『教育国語』、12 号、13 号、15 号、20 号、21 号、23 号、25 号、26 号、28 号、東京：むぎ書房 (言語学研究会 (編) 1983 に再録)
- 奥田靖雄 1970『国語科の基礎』、東京：むぎ書房
- 奥田靖雄 1974「単語をめぐって」、『教育国語』36 号、東京：むぎ書房 (松本泰丈 (編) 1978 に再録)
- 杉本和之 1995、1997「意志動詞と無意志動詞の研究—その 1・その 2」、『愛媛大学教育学部紀要 2 人文社会科学』、28 卷 3 号、29 卷 2 号、松山：愛媛大学教育学部
- 砂川有里子 1984「〈に受身文〉と〈によって受身文〉」、『日本語学』、3 卷 7 号、東京：明治書院
- 鈴木重幸 1972『日本語文法・形態論』、東京：むぎ書房
- 鈴木重幸 1980「品詞をめぐって」、『教育国語』62 号、東京：むぎ書房
- 鈴木重幸・鈴木康之 1983「編集にあたって」、『日本語文法・連語論 (資料編)』、東京：むぎ書房
- 寺村秀夫 1982『日本語のシンタクスと意味 I』、東京：くろしお出版

Categorical Meaning of a Word as a Linkage between Lexicon and Grammar(2)

—The Nature of Categorical Meaning and its Relation to Teaching Japanese—

HAYATSU Emiko

This paper is a continuation of the author's most recent paper (Hayatsu 2015), and these two parts constitute one article. This article aims to explain the importance of 'categorical meaning' as a linkage between vocabulary and grammar. A word has its own lexical meaning, namely referential meaning, as well as its own grammatical (both morphological and syntactical) characteristics. Here, morphological characteristic means whether or not a word can change its form grammatically, and if it can, what kind of changes would take place; syntactical characteristic means how a word is combined with other words when they are composed into a sentence.

When a word is used as an element of a sentence, it does not only express its lexical meaning but it also expresses its grammatical meaning, namely its 'semantic role' in that sentence at the same time. This correlation between lexical and grammatical features is thought to come from a 'categorical meaning' of each word. The categorical meaning of a word could be thought as an aspect which is included in its lexical meaning and brings about its grammatical characteristics in a sentence. The words showing the same grammatical characteristics have the same categorical meaning in common.

In the previous paper (Hayatsu 2015), I demonstrated many kinds of categorical meanings in Japanese. And in this paper, I showed how and to what degree these categorical meanings work in the sentence, and discussed its importance and effectiveness in the teaching of Japanese as a second language.